

アメリカ高等教育変革期における大学図書館

——19世紀末・20世紀初頭における分散システムの発生・展開を中心に——

Academic Libraries in the Revolutionary Period of
American Higher Education

——Focused on the Emergence and Development of Decentralized
Library System at the End of 19th and Beginning of 20th Century.

三 浦 逸 雄
Itsuo Miura

Résumé

The purpose of the paper is to describe the development of American academic libraries in terms of the emergence and evolution of decentralization from the end of the nineteenth century to the early twentieth century, and to determine what effect the changes in American higher education during these years had on organizational patterns of academic libraries.

First, the growth of higher education is discussed on the basis of statistical data of academic institutions, student enrolment, and faculty staff. The emergence of graduate education, the diversification of professional education, and the change in methods of instruction are subsequently considered as distinctive features of academic reforms in the period, which had affected the process of decentralization.

Secondly, the early organizational patterns of decentralization are identified in some college and university libraries. These are: (1) seminar library and laboratory collection; (2) reserved book system; and (3) departmental library. Then, two basic types are deduced by examining some cases of decentralization: (1) seminar libraries and departmental libraries diverged from a college library (mainly in the case of universities which had developed from traditional colleges), and (2) departmental libraries which had developed parallel to a central library since the founding of a university (mainly in the case of research-oriented universities modeled after German universities). Among them, there are many variations, including professional school libraries and quasi-departmental libraries.

Finally, based on the results of several surveys, the state of departmental libraries in the 1920's and 1930's are presented in terms of collection, administration, staff, service, acquisition and processing.

To conclude, the author suggests taking into account the historical perspective in dealing with the issue of centralization vs. decentralization in academic library systems.

三浦逸雄：東京大学教育学部助手

Itsuo Miura, Research Assistant, Faculty of Education, University of Tokyo.

- I. 序
 - A. 問題の所在
 - B. 用語の定義
- II. 高等教育の変革・発展
 - A. 量的拡大
 - B. 大学院教育と専門職教育の展開
 - C. カリキュラムの改革
 - D. 教授法の変化
- III. 大学図書館の発展
 - A. 蔵書の拡大
 - B. サービスおよび組織の多様化
- IV. 1920, 30年代における部局図書館
 - A. 部局図書館の数と蔵書規模
 - B. 管理運営
 - C. 部局図書館員とサービス
 - D. 収書と整理
- V. 結語

I. 序

A. 問題の所在

戦後、日本の大学図書館は様々な面においてアメリカの大学図書館を模倣するか、あるいはその影響を少なからず受けてきた。今日、そのなかのあるものは一応の定着をみており、またあるものは停滞ないしは失敗に帰している。いずれにせよ、筆者の乏しい知見の範囲ではあるが、当のアメリカの大学図書館の組織やサービスがいかなる歴史過程の中から生れてきたものなのかを十分にふまえた上で、アメリカのシステムを導入したところは少なかったように思われる。また、その理解に寄与し得る研究も乏しかったといえよう。

大学図書館が大学というシステムのサブシステムである以上、大学の機能、更には広くその国の高等教育体制に、直接あるいは間接に規定されていることは改めて指摘するまでもないだろう。従って、特定の国の大学図書館を研究する場合、当然その国の高等教育の歴史や大学の特性を視野に入れる必要がある。こうした視点を欠落させ現象面だけを追いかけることは、単なる表面的理解に終る結果となる。この点に留意して、本稿ではアメリカだけでなくわが国でも重要な問題として認められている大学図書館の集中システム対分散システムの問題を考察したい。

ニューヨーク市立カレッジの図書館長 H. E. Bliss は、1912年にそれまでなされた議論をふまえて、集中システム対分散システムの問題を次のように定式化した。

特定の利用者 (special users) が徹底的に利用できるように、図書館のすぐれた資源を分散すべきなのか、あるいは大学全体のより広範な利用のために集中すべきなのか、はたまた需要のある図書の大部分を最も要求の強いところに置き、利用の重複するものは複本を用意すべきなのか、それともそうした図書は、大半の図書を所蔵している場所で利用させ、他の場所では、必要に応じて中央図書館から貸し出し、一定期間別置しておくべきなのか、といったことが実際上の問題点である。¹⁾

この Bliss の指摘から60年以上も経た1974年に大学・研究図書館協会 (Association of College and Research Libraries) が分館 (branch library) の設置および運営の規準とすべきガイドライン (案) を発表した。その序文において、"長い間にわたって議論されてきたが、解決の難しい大学図書館組織に関する問題のひとつは、図書館サービスの集中化 (centralization) と分散化 (decentralization) である"²⁾ と述べられているように、今日でも、この問題は依然として大学管理者、図書館管理

者、利用者を悩まし続けている。

この問題の関係文献は19世紀末から今日まで相当の数にのぼり、その論点も多岐にわたっている。また、1902年のアメリカ図書館協会 (American Library Association, 以下 ALA と略す) マグノリア大会の大学・参考図書館部会でこの問題が議題にとりあげられたのを嚆矢として、以後、何度も ALA の大会で論議されている。この他、ここ20年間に限ってみても、1960年のアメリカ東部地区大学図書館員大会で「集中化と分散化」と題するシンポジウムが催され、⁸⁾ その10年後の1970年には、研究図書館協会 (Association of Research Libraries) による大学図書館管理運営に関する調査報告書の中でこの問題が言及されている。⁴⁾

更に付け加えるならば、集中システム対分散システムの問題が、大学図書館管理においていかに重要な位置を占めているかは、1928年刊の J. I. Wyer,⁵⁾ 1936年刊 (初版) の W. M. Randall と F. L. D. Goodrich,⁶⁾ 1944年刊 (初版) の G. R. Lyle,⁷⁾ 1945年刊 (初版) の L. R. Wilson と M. Tauber,⁸⁾ そして1971年刊の R. D. Rogers と D. Weber⁹⁾ までの大学図書館管理の標準的な教科書における一貫した扱いによってもうかがい知ることができる。¹⁰⁾

以上のように、集中システム対分散システムの問題は早い時期からアメリカの大学図書館界で重要な論点として認められ、絶えず論議的となってきたが、いまだに一般的な解決がついていない。否、そもそも一般的な解決は不可能というのが正しいのかもしれない。というのは、この問題に関係する要因は数多く、しかもそれが各大学の固有事情により複雑に絡み合っているからである。従って、1925年にデューク大学のレファレンス・ライブラリアン L. T. Ibbotson の次のような指摘が、現在でも十分に通用すると思われる。

部局図書館の議論は、常にユートピア理論か、もしくは特定大学に固有の状況の説明に退化しがちである。万能薬は不可能である。実際、個別状況とその特性がどうしても問題となり、いかにすばらしい一般化であっても、また図書館が望みを託する専門的な方策であってもくつがえされてしまう。¹¹⁾

換言すれば、この問題には変数が多く、しかも数量化の困難なもの (例えば、利用者の満足度) が相当みられ、定量的研究を難しくしている。¹²⁾

そこで本稿の意図するところは、集中システム対分散システムの問題について一般的解決を提示しようとするのではなく、分散化の展開を19世紀後半 (南北戦争後) から20世紀初頭にかけてのアメリカ高等教育変革期における大学図書館の拡大とサービスの多様化として捉え、この問題に内在する諸要因を解明しようとするものである。

B. 用語の定義

分散システムの展開を論ずるにあたって、きわめて厄介な問題は用語の定義である。今、用語の定義にとりかかる前に、分散システムの形態について考えてみると、それは2つの基本形態に大別できる。ひとつは資料の種類・形態に基づくパターン (operation-oriented pattern), すなわち地図、公文書、貴重書などを専門に扱う図書館であり、もうひとつは利用者や主題分野に基づくパターン (user and subject pattern) である。¹³⁾ 本稿の対象とするのは後者の形態である。

分散システムにおいて中央図書館¹⁴⁾以外に単位となる図書館を表現する名称は数多く用いられており、関係文献を調べた限りでは14も拾いあげることができた。¹⁵⁾ 各々の名称には、それをを用いる人により多様な意味がこめられているので、ひとつひとつ厳密な定義を下すことは至難の技であるが、議論を明確にするためいくつかの名称について大筋のところで定義をしておく。

School library は医学図書館 (medical library) や法学図書館 (law library) に代表されるプロフェッショナル・スクールの図書館であり、通常、中央図書館の管理からは独立している例が多い。わが国における学部図書館に相当するこの種の図書館は、また、Collegiate library あるいは College library (リベラルアーツ・カレッジの College library とは区別される) と呼ばれることもある。¹⁶⁾ Divisional library とは学際的な研究領域を含むいくつかの関連する主題分野のニーズを充たすために組織された図書館であり、その最も大きな区分は人文科学、社会科学、自然科学の3分野である。¹⁷⁾ 狭義の Departmental library (以下、学科図書館 (室) と訳す) は、ひとつの学科の教育・研究の便宜のために設けられたコレクションで、その多くは後述の Seminar library や Laboratory collection から成長したものであり、コレクションの規模や利用対象者数の点で区別される。¹⁸⁾ 学科図書館は、中央図書館内に専用の部屋を割り当てられていることもあるし、中央図書館外の学科専用棟に設置されていることもある。Seminar library (以

下、セミナー図書室と訳す)は、しばしば学科図書館と同じ意味合いで使われることがあるが、セミナー室に保管されている一時的な性格の小規模のコレクションであり、中央図書館コレクションの一部とみなされる。¹⁹⁾ 通常、セミナーに参加している大学院生や学部上級生が利用する。Laboratory collection (以下、実験室コレクションと訳す)や Office collection (以下、研究室コレクションと訳す)は、図書館 (library) といえるものではなく、きわめて小さなコレクションであり、その資料は実験室もしくは研究室の装置や備品の一部とみなされる。こうしたコレクションを置いている部屋は、決まった時間に開くわけではなく、部屋のカギを所持している者だけが随時利用できる仕組みになっており、普通、教員が管理責任をもっている。この種のものは大学の正規のコレクションではあるが、定期的なインベントリーを除いて、大学図書館長の管理下に入っていない。²⁰⁾

以上のような中央図書館とは別個の図書館を総称する用語として、Separate library, Special library,あるいは広義の Departmental library (以下、部局図書館と訳す)が使われている。²¹⁾ また、中央図書館の管理下にある部局図書館を Branch library と呼ぶこともある。²²⁾

前述のように、こうした用語の定義はあくまでも便宜的なものであり、実際にこれらの名称が定義通り一貫して用いられているわけではない。

II. 高等教育の変革・発展

“カレッジとユニバーシティの急速で包括的な成長が図書館の性格を決定づける最も重要な要因であろう”²³⁾と R. E. Ellsworth が指摘したように、アメリカにおいて高等教育の発展が大学図書館に大きな影響を与えてきた。特に、19世紀後半(南北戦争後)から20世紀初頭にかけてのアメリカ高等教育の改革は、20世紀における大学図書館の発展を基本的に方向づけたといつて過言ではないだろう。“カレッジの時代は去り、ユニバーシティの時代が始まった”²⁴⁾という言葉で要約されるこの時期の高等教育の変動には様々な側面が認められる。ここでは、それらの中から大学図書館に直接および間接に影響を与えた4つの側面をとりあげる。²⁵⁾

A. 量的拡大

1870年から1950年までの高等教育の発展を数量的におさえるために、高等教育機関数、在学者数(大学院生も含む)、教員数の3つの指標を選んだ。これらの指標の10年毎の数字を示したのが第1表である。この表を見る

第1表 アメリカにおける高等教育機関数,¹⁾
在学者数, 教員数

	機関数(校)	在学者数(千人)	教員数(人)
1870年	563	52	5,553
80	811	116	11,552
90	998	157	15,809
1900	977	238	23,868
10	951	355	36,480
20	1,041	598	48,615
30	1,409	1,101	82,386
40	1,708	1,494	146,929
50	1,851	2,659	246,722

出典: U. S. Department of Commerce. *Historical statistics of the United States from colonial times to 1957*. Washington, D. C., Government Printing Office, 1960. p. 210-11. より作成。

- 1) 高等教育機関には総合大学、カレッジ、プロフェッショナル・スクール、ジュニアカレッジ、教員養成カレッジ、2年制教員養成スクールが含まれている。

と、特に成長が著しいのは1870年から1880年にかけての10年間であり、機関数は248校ふえ、在学者数と教員数はほぼ倍近く増加している。それ以後、1900年から1910年にかけての機関数の減少を除けば、すべての面で成長をつづけている。

このような量的拡大をもたらした最大の要因は、その大半が州立大学である国有地附与カレッジ (landgrant college) の創設・発展である。1862年に連邦議会を通過して成立をみた第1次モリル法、この法律の精神を実際に具体化してゆくための修正・補助・追加立法としての1887年のハッチ法、1890年の第2次モリル法、更には1898年の補遺法の成立によって19世紀末までに州立の高等教育機関(州立農工カレッジおよび州立ユニバーシティ)がすべての州と準州に設立されるに至った。²⁶⁾ 1860年から1900年までの40年間に創設された州立の大学は39校を数え、一般大衆の子弟に高等教育を受ける機関を提供した。²⁷⁾ こうした州立大学の学生数は1885年から1895年までの10年間に32%の伸びを示し、同時期の東部の私立カレッジの20%を上回るものであった。²⁸⁾

州立大学の発展の他に、個人基金による大学の設立も高等教育の量的拡大に寄与した重要な要因であった。例えば、1868年のコーネル大学、1876年のジョンズ・ホプ

キンス大学, 1891年のスタンフォード大学といった私立大学の創設があげられる。

もっとも高等教育の急速な発展の背景には, 南北戦争後における工業化, 都市化, 農業の資本主義化といった社会・経済的な構造変動があったことは改めて指摘するまでもないだろう。²⁹⁾

B. 大学院教育と専門職教育の展開

1860年代から第1次大戦にかけての時期に, アメリカ合衆国に起こった変化の一部は, ドイツに始まる発展の論理的帰結であった。大学院の発展と大学における研究組織がその例である。³⁰⁾と Ben-David は書いているが, アメリカにはそれ以前にすでに大学院教育が存在していた。しかし, 1860年以前の大学院教育は現代的な意味での大学院教育とはいえず, その上それを育成してゆく社会的基盤を欠いていたため, 結局, 挫折もしくは失敗に終わっている。³¹⁾

アメリカで純粋に「真理の探求」を理念にかかげた最初の研究センター大学はジョンズ・ホプキンス大学である。³²⁾ 1876年のジョンズ・ホプキンス大学創立が植民地時代からのカレッジや新設の大学に影響を与え, 大学院教育の急速な展開をみることとなった。³³⁾ 特に, 1890年代から大学院の数が州立大学を中心に急増し, 1900年から1940年の間に博士号を授与する大学の数は3倍以上に増えた。³⁴⁾ 第2表で明らかのように, 大学院教育の急成長に伴って学位取得者数も増加していった。

第2表 アメリカの大学が授与した取得学位¹⁾
(earned degrees)

	博 士 号	修 士 号
1861—64年	7	—
75	23	661
85	77	1,071
95	272	1,334
1905	369	1,538
15	611	3,577
25	1,213	9,118
35	2,800	18,298
45	2,136	16,312

出典: *American universities and colleges*. 9th ed. Washington, D. C., American Council on Education, 1964. p. 1260-1. より作成.

- 1) 取得学位とは課程もしくは研究によって得た学位である。

南北戦争の頃までは, 名誉学位を除いて, 学位を取得するためにヨーロッパの主要な大学(その大部分がドイツの大学)へ留学しなければならなかった。ドイツへの留学生は1860年代に1,000人を越え, 1880年代にそのピークに達し, その数は2,000人にのぼった。結局, 19世紀を通じて約1万人のアメリカ人が学問の巡礼者としてドイツに渡ったと推定されている。³⁵⁾ところが, 1861年にエール大学がアメリカで初めて博士号(Ph.D.)を授与してから, 自国の大学からの学位取得者は増加の一途をたどった。とりわけ, 1890年代から急激にふえ, 1935年の博士号授与数は1885年の36倍強である。修士号についても同様の傾向がみられた。

19世紀の後半から大学の教授職も特別の専門教育を必要とする職種として認められるようになり, また大学の教育課程は以前よりも教科が細分され, 教員が大学院で専攻してきた領域と近いものになった。かくして, 大学の教員は牧師出身ではなく, 大学院から供給されるようになり, 彼らは学問の専門家, すなわち化学者, 経済学者, 植物学者, 歴史学者とみなされるに至った。³⁶⁾

学問の専門職業化により, 科学およびその研究方法に対する関心が高まり, 専門分野の全国的な学会の創設や主要な学術雑誌の創刊が相ついで。1876年のアメリカ化学会(American Chemical Society)から1905年のアメリカ社会学会(American Sociological Society)の間に11の主要な学会が組織され,³⁷⁾1878年の *American Journal of Mathematics* から1898年の *American Journal of Psychology* までに, 各分野の主要な学術雑誌が15誌ほど創刊された。³⁸⁾ こうした傾向は全国レベルだけでなく州や大都市といった地域レベルにおいても顕著であった。³⁹⁾

神学, 医学, 法学の3つの伝統的な専門職についての教育は, 比較的古くから行われていた。牧師の養成を目的としていた初期の宗派カレッジを一種の神学のプロフェッショナル・スクールとみなすこともできようが, こうしたカレッジであっても1810年代から牧師養成の教育を神学部あるいは神学科に委ねるようになっていた。また, 18世紀後半から医学部が, 19世紀の10年代から法学部がそれぞれリベラル・アーツ中心のカレッジにも設置され始めた。⁴⁰⁾

上述の伝統的な専門職教育は, 1870年頃から数量的な発展をみせた。1870年と1897年の2つの時点での学生数の増加についてみると, 神学は3,254名から8,173名, 法学は1,653名から10,449名, 医学は6,194名から24,377名

にふえている。⁴¹⁾ この3分野以外の専門職教育も19世紀の終り頃から1940年頃にかけて著しい展開をみせた。それらは歯学、薬学、教育、経営、ジャーナリズム、建築、看護、会計、社会事業、および州立大学が主に引き受けた農学と工学といった様々な領域にわたっていた。⁴²⁾ 第3表は1801年から1900年までの6つの分野のプロフェッショナル・スクール数の推移を示したものである。この表をみると19世紀最後の四半世紀では神学に代表される古典的な専門職教育よりも新参の専門職教育の伸びが目立っている。

第3表 19世紀におけるプロフェッショナル・スクール

	1801-25年	1826-50年	1851-75年	1876-1900年
神学	18	25	72	47
法学	3	7	24	50
医学	12	22	33	86
歯学	0	2	7	47
薬学	2	4	8	38
獣医学	0	0	2	15
計	35	60	146	283

出典：Bledstein, B. J. *The culture of professionalism: The middle class and the development of higher education in America*. New York, W. W. Norton & Company, 1976. p. 83.

こうした専門職教育の発展がアメリカの高等教育に与えた影響を仙波克也は、多様化、世俗・実用化、大衆化の3点に要約している。⁴³⁾

C. カリキュラムの改革

D. Riesman と C. Jenks が「新古典主義」⁴⁴⁾と呼んだ古典語を中心に近代哲学（自然哲学と道徳哲学）を加味した伝統的なリベラル・アーツの必修制カリキュラムが崩れ、実用的・技術的な内容を盛り込んだ選択科目制が出現・普及していったのは19世紀後半であった。それ以前にもカリキュラムにおける実用的科目对古典の科目の問題が論じられ、徐々にいわゆる近代の学問がとり入れられてきてはいたが、選択科目制を徹底化したのは1869年にハーバード大学の学長に就任した C. W. Eliot だった。⁴⁵⁾ そのハーバード大学では、1872年に4年生、1879年に3年生、1884年に2年生と段階的に必修科目制が廃止され、必修科目は1年生に対してのみ課されていたが、それも1897年までには修辞学の1科目を残すところまで徹底された。⁴⁶⁾

Eliot の選択科目制は、エール大学の学長 N. Portor やプリンストン大学の学長 J. McCosh などの強い反対に出合ったが、1870年から1910年の40年間にその全盛期を迎えた。この選択科目制に最も好意を示したのは公共（地域社会）への奉仕をうたっていた中西部および西部の大規模な州立大学であり、その次が財源の潤沢な大規模私立大学であった。他方、選択制の導入が遅れたのは、財政が豊かでない南部の州立大学、伝統および社会的、経済的、宗教的利害の絡んでいたニューイングランドなどの小規模カレッジだった。⁴⁷⁾ しかし、1890年以後、小規模のリベラル・アーツのカレッジでも選択制を導入し始めていた。

このような選択科目制の採用⁴⁸⁾によりカリキュラムが大幅に拡張された。この点に関して、J. S. Brubacher と W. Rudy は4つの側面を指摘している。すなわち、(1)あらゆる主題の重要性を認めたこと、(2)従来の古典語や人文学以外に、科学的・実用的コースの出現、(3)主題専門化の急速な発展、(4)コース数の増加である。⁴⁹⁾ かくして、19世紀末までに、自然哲学は物理学、化学、生物学、植物学、地質学といった諸科目に分かれ、道徳哲学は政治学、経済学、社会学、人類学に細分され、文学も詩、戯曲、小説の研究に専門分化していった。こうした傾向につれカレッジの教授団も個々の教授職から主題部門に基づいた編成に変化した。ここに前述の大学院教育とあいまってヨーロッパの大学における講座制とは異なるアメリカ独特の学科制度の確立をみるのである。⁵⁰⁾ コーネルおよびジョンズ・ホプキンスの両大学では1880年に学科(department)の自治(autonomy)が認められたが、大部分の主要大学で学科制度がはっきりした形をなすのは1890年代のことである。⁵¹⁾

D. 教授法の変化

選択科目制の導入以前に主として行われていた教授法は暗唱(recitation)であった。この方法の目的は「チューターが唱える章句を学生はそのまま声を出してくり返す練習を通して、教科書やチューターによる講義の内容を丸暗唱させること」⁵²⁾にあった。この暗唱練習と並行して講義方式も用いられていたが、それは一般に暗唱の補助手段として副次的な地位にあった。

1810年代から増加し始めたドイツの大学への留学生の関心をひきつけ強い印象を与えたものは、「真理のための真理」を追求する学問の理念の他に教授方法と大学施設であった。これらドイツ帰りの留学生やドイツ出身の学者によって、実験室、講義、セミナー⁵³⁾といった教授法

がアメリカの大学に導入され、19世紀後半には従来の暗唱に代って支配的な位置を占めるまでになった。自然科学や社会科学で広範に用いられる講義は、教授が自らの見解を表明する手段であったし、実験室やセミナーは、将来、研究者や学者になろうとする学生を教育・指導するための教授法であった。つまり、“化学者、物理学者、生物学者に対する実験室に相当するものが、研究志向の歴史学者、経済学者、言語学者に対するセミナーであった。”⁵⁴⁾

1840年代にベルリン大学の歴史学者 Leopold von Ranke が、文献学 (philology) から歴史研究に導入したセミナー方式 (historical seminarium と呼ばれていた) は、その後、彼の弟子たちによってドイツ全土に広められた。このセミナー方式をドイツからアメリカに初めて移植したのは、1869年ミシガン大学における C. K. Adams の歴史学の選択コースであった。次いで、この方式はコーネル、ハーバード、エール、コロンビア、ジョンズ・ホプキンスといった主要な大学にも波及し、アメリカにおけるオリジナルな学問研究への途を切り拓いた。

ミシガン大学の C. K. Adams は、歴史学のupper level コースのテーマに「英国憲法の発展」をとりあげたが、そこでの教授法はサクソン族の時代から1832年の選挙法改正にいたる時期のうちで最も重要な事項を含む問題を、大学図書館所蔵の文献に言及しながらクラスの学生に割り当ててゆく方法であった。このクラスは6人から10人までのいくつかのグループに分けられ、各メンバーができるだけ教授の研究指導を受けられるように、毎週1回、グループ毎の会合が持たれた。その会合において、ひとりの学生は割り当てられた問題について準備してきた論文を全員の前で読み上げることが求められ、他の学生には同じ主題についての研究成果の提出が義務づけられていた。こうした方式によって、学生は英国憲法に関する主要事項の十分な知識を確実に獲得することができた。このセミナーの試みは、Adams 自身が予想していた以上の成果をあげ、学生の熱意も賞賛に値するものであった。⁵⁵⁾ ミシガン大学では、歴史学に続いて英文学、ギリシャ文学、政治経済学の各分野にこの種のセミナーが採用されるようになった。

小人数の学部上級生や大学院生を対象にした高度のセミナーの他に、大人数の学部下級生を対象としたトピック方式 (topical method) と呼ばれる授業もこの時期のアメリカの大学で広く行われていた。⁵⁶⁾ この方式は、セミナーのようにオリジナルな研究を要求するものではな

く、教授が講義の中でとり上げた主題に関係するいくつかのトピックを学生に割り当て、決められた期限までに基本文献に記されている二次的な情報を主に利用したレポートを提出させるやり方であった。

以上、4つの側面に焦点をあてて、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのアメリカ高等教育の動向を概観してきた。最後にこの時期における変革を Vesey の言葉を借りて要約するならば、次のように表現することができよう。すなわち、教養 (liberal culture) の理念を具体化したリベラル・アーツ・カレッジ、研究 (research) の理念を具体化したグラデュエート・スクール、社会的実用 (utility) の理念を具体化したプロフェッショナル・スクールの三位一体からなる“アメリカ的大学 (American University)”の出現である。⁵⁷⁾

III. 大学図書館の発展

前章で概観した19世紀後半からの高等教育の変革・発展は、大学図書館の様々な側面に直接あるいは間接に影響をもたらした。本章ではその影響を蔵書、サービス、組織の面から検討する。

A. 蔵書の拡大

既に述べてきたように大学院教育の発展による研究の重視、専門職教育やカリキュラム改革による研究・教育内容の多様化、新しい教授法の導入による図書利用の増大といった諸要因が、大学図書館の姿を大きく変貌させる力として働いた。一般に、それ以前の図書館は、寄贈書、古くなった図書、古典の標準的な版などによって蔵書が構成されており、その管理は図書館学の専門教育を受けていない人々が担当し、週に数時間しか開館せず、学生の利用はほとんどみられなかった。ところが、19世紀末になると、図書館は大学の研究・教育の中心あるいは活力源とみなされるようになり、学長、学部長、学科長、教授、図書館長、卒業生がともに図書の収集に強い関心を示すようになった。

研究活動における図書館の重要性を早くから認めていたのは、ドイツの大学に留学した経験のある人々であった。⁵⁸⁾ とりわけ、ゲッティンゲン大学の図書館が大学の研究教育プログラムと密接な関係をもっていることに留学生たちは強い感銘を受けた。帰国したこれらの留学生の影響により、ドイツの大学図書館の蔵書を模範にしてアメリカの大学図書館は学術的な内容の蔵書を構築する努力を開始した。各大学は早急な蔵書構築を目指して、広

アメリカ高等教育変革期における大学図書館

い分野にわたる図書や雑誌を含む個人蔵書の獲得にねらいをつけた。その結果、19世紀の最後の15年間に、ヨーロッパからアメリカへコレクションの流出が激しくなり、ヨーロッパの学术界を刺激することにもなった。更に、アメリカの大学はロンドン、ライプツヒヒ、パリといったヨーロッパの主要都市や書店と関係を持ち、そこを通して学術的な図書や雑誌を輸入した。⁵⁹⁾

こうした努力を積み重ねることによって、大学図書館はその蔵書を急速に拡大していった。(第4表参照)特に、イリノイ、ミネソタ、ミシガン、カリフォルニアといった州立大学図書館の成長には目を見張るものがあった。

図書館蔵書の充実を促した要因のひとつとして、1910年前後から顕著になった図書館基準の設定があったことも看過できない。例えば、1908年に全国州立大学協会(National Association of State Universities)は、学

部学生の教育のための十分な複本、大学院課程を持つ場合に、研究用の資料を所蔵する適切な部局図書館と中央図書館を持つべきであると勧告している。また、プロフェッショナル・スクール図書館の基準も検討され、1912年にアメリカ・ロー・スクール協会(Association of American Law School)の会合で、各々のスクールが5千冊以上の蔵書を持つべきであるという提案が採択された。⁶⁰⁾

B. サービスおよび組織の多様化

“カレッジ”から“ユニバーシティ”への発展に伴い、大学内の諸グループから図書館に種々様々な要求が出されるようになった。これらの要求に資金や施設といった要因が絡み合って、図書館組織・サービスの多様化が促された。コロンビア大学の法学図書館長 F. C. Hicks は、実験室や事例研究法(case method)による教

第4表 蔵書数と授与学位数(カッコ内)¹⁾

年		1850 ²⁾	1876	1900	1910	1920	1930	1940
大学(創立年)		冊	千冊	千冊	千冊	千冊	千冊	千冊
Harvard	(1636)	84,200	160 (5)	976 (35)	850 (41)	2,028 (49)	2,971 (105)	4,159 (153)
Yale	(1701)	50,481	100	309 (26)	575 (27)	1,250 (28)	1,983 (83)	2,219 (113)
Columbia	(1754)	12,740	17	345 (21)	448 (44)	747 (69)	1,222 (184)	1,715 (198)
Illinois	(1867)	—	11	47	157 (12)	461 (29)	836 (70)	1,217 (130)
Chicago	(1891)	—	—	303 (43)	500 (45)	599 (65)	915 (186)	1,300 (163)
Minnesota	(1851)	—	13	60 (3)	145	300 (1)	654 (67)	1,088 (113)
Michigan	(1817)	5,000	30	160 (4)	270 (9)	432 (14)	784 (81)	1,098 (141)
California	(1818)	—	14	99 (2)	248 (6)	479 (23)	756 (83)	1,081 (122)
Cornell	(1865)	—	39	268 (19)	383 (35)	630 (45)	810 (125)	844 (131)
Princeton	(1746)	16,000	46	144 (3)	270 (9)	444	643 (31)	959 (43)
Pennsylvania	(1740)	5,000	20 (1)	260 (15)	293 (35)	503 (21)	712 (90)	934 (71)
Stanford	(1885)	—	—	65 (2)	174 (5)	320 (6)	530 (41)	773 (42)
Texas	(1887)	—	—	45	72	194	422 (19)	639 (46)
Northwestern	(1851)	—	28	70	142	193	280 (23)	637 (58)
Duke	(1838)	—	12	16	40	—	192 (8)	600 (23)
New York	(1831)	4,000	4	54 (7)	100 (10)	153 (6)	319 (46)	592 (125)
Brown	(1764)	31,600	46	135 (3)	186 (5)	270 (3)	403 (11)	573 (19)
Johns Hopkins	(1876)	—	5	194 (35)	142 (25)	225 (31)	370 (64)	567 (65)
Ohio State	(1870)	—	1	45	95	215	359 (68)	552 (97)
Case Western Reserve	(1826)	—	11	36	90	138	350 (5)	554 (25)
Dartmouth	(1769)	—	48	105	120	150	250 (1)	512

出典: Edelman, H. and Tatum, G. M., Jr. “The development of collections in American university library,” *College and research libraries*, Vol. 37, May, 1976, p. 238-43. より作成。

1) 1940年時点で蔵書数50万冊を越える大学を選んだ。

2) 1850年の数字は Danton, J. P. *Book selection and collections: A comparison of German and American university libraries*. New York, Columbia Univ. Press, 1968, p. 20. による。

育方法が図書館に及ぼした効果を3点指摘している。

- (1) ひとつのコースで必要とする図書の冊数(複本を含め)が、以前より多くなった。
- (2) 手続きせずに利用できる開架コレクションに対する要求が出てきた。学科図書館設置の動きは図書への容易なアクセス要求のひとつの結果である。
- (3) わずかな図書による教授法(few books method)から多くの図書による教授法(many books method)への発展は、リザーヴ・ブック制度を前提にしている。⁶¹⁾

Hicksの指摘した(1)は、蔵書の拡大にかかわる要因であり、(2)と(3)はセミナー図書室、実験室コレクション、プロフェッショナル・スクール図書館の発展を促す要因とみることができよう。すなわち、図書館組織・サービスの多様化は大学図書館分散システムの展開として把握できる。

大学図書館における分散システムの起源をはっきり定めることは困難であり、またそれはあまり意味のあることでもない。そこで、ここでは分散システムの初期形態として、セミナー図書室、リザーヴ・ブック制度、時間的に少し遅れて出現した部局図書館(ただし、プロフェッショナル・スクール図書館の設立は古い)の3つをとらあげる。

1. セミナー図書室

既に述べたように、アメリカで最初にセミナー方式を導入したのはミシガン大学の歴史学セミナーであった。このセミナーでは、最初の数年間中央図書館の貧弱な資料に依存していたが、C. K. Adams は4,300ドルの匿名寄付を受けて、イギリスから研究に価値のあるコレクションを購入し、セミナー用の文献を用意することができた。1883年に新しい図書館が完成すると、他のセミナー室と共に歴史学セミナー室も新図書館の書庫近くに設けられた。この部屋にセミナーで利用するコレクションが備えられ、貴重書や普段あまり利用しない図書は耐火構造の書庫に収納された。セミナー室にはテーブルと静かに個人研究を行うのに必要なあらゆるものが配備されていた。このミシガン大学のセミナー方式は、M. C. Tyler 教授によりコーネル大学に移植され、同じようなセミナー図書室がつくられた。⁶²⁾

コロンビア大学では、セミナー・ミーティングは図書館とは別の場所で開かれていたが、中央図書館の建物に歴史学と政治学のための専用図書室を設けていた。1887年にはそのコレクションは約1万5千冊を数え、個人研

究のためのテーブルやイスなどを備え、歴史学と政治学のクラスとセミナーにサービスしていた。この図書室で特徴的なことは、入口近くに専門図書館員 G. H. Baker を配置していたことである。彼はこの部屋で研究を行う者だけに入室を許し、資料の利用について利用者に助言を与えていた。⁶³⁾ また、彼は、週1回歴史学と政治学の文献についての講義も担当していた。⁶⁴⁾

ジョンズ・ホプキンス大学の歴史学セミナーは、1876年の開学直後、公文書が豊富でアメリカ史資料の充実しているメリーランド歴史協会の一部屋を借りてセミナー・ミーティングを開いていた。しかし、1881年には、協会が大学から遠かったことやヨーロッパ史の文献に乏しかったことなどの理由から、蔵書約9万冊の図書館を付設するピーボディ研究所の小講義室に移った。そこでは長いテーブルを囲んで6人の上級生が週2回の会合を開いていた。1回はゲルマン民族に関係する初期ヨーロッパ史の資料研究のためであり、もう1回はアメリカ合衆国の地方制度の講義とオリジナルな論文の検討のために集まった。セミナーのメンバーによって利用され、言及される資料はすべて長いテーブルの上に陳列され、説明の際には各メンバーに回覧された。1883年にはこのセミナーは大学に戻り、これまでより広い部屋を使い、そこにはセミナー用のコレクションが収容された。このコレクションは中央図書館の蔵書から関係のある図書をすべて移してきたものであり、それに加えて、セミナーと特に関連する憲法や経済についての資料をイギリスやドイツから徐々に購入していった。⁶⁵⁾

アメリカの大学では以上のようなセミナー図書室が相当普及し、1907年のALA大会では、32の大学図書館が平均6つのセミナー図書室を所有し、20の大学図書館ではセミナーのコレクションと中央図書館の蔵書が重複していると報告されている。⁶⁶⁾ ところが、セミナー図書室に専任の担当者を配置している大学はわずか6校で、しかもコロンビア大学のように主題知識を有する図書館員はほとんど皆無というのが実状であった。

W. Austin は中央図書館の蔵書からセミナー図書室に移される図書を次の3つのタイプに分類している。(1) セミナー室での研究を許可されている者以外が利用しそえない図書、こうした図書は期限なしでセミナー室に置かれる。(2) セミナーの学生が一学期間もしくはそれ以上の期間利用する図書、およびセミナーでの教育のために教員が一定期間置いておくことを指示した図書。(3) 特定主題を研究している者がセミナー室への配架を求めた

図書、これは研究が済み次第返却する条件でその研究者に管理を任せる。⁶⁷⁾

セミナーの場合と同じように自然科学の実験室でも図書を必要とすることに変わらなかった。主題や実験の歴史に関連してだけでなく、実際の実験作業においても図書が用いられ、それも1、2冊では足らず、数冊の図書に情報が分散している場合が多かった。従って、実験室にもかなりの冊数のコレクションが備えられ、分散システムの構成要素のひとつになっていた。

2. リザーヴ・ブック制度⁶⁸⁾

ハーバード大学では、セミナーという名称は用いられていなかったが、セミナーの理念は早くから浸透していた。それは1870年に歴史学の助教授に就任したH.Adamsが始めたものであった。彼は、当初、中世法制史を担当していたが、まもなく少数の上級生とともにアングロサクソン法という独自の分野に進出した。そこにおいてAdamsはアメリカにおける組織的な歴史研究に貢献することになる研究方法を取り入れた。その方法というのは、“第一に特別な関心を持っている優秀な学生の選抜、第二にこれらの学生を狭く絞った研究領域の1次情報源へ導く、第三に広範囲にわたって選び抜かれた図書への学生の自由なアクセス”であった。⁶⁹⁾

ハーバードにおけるこうしたセミナー方式の教育方法は、当然、数多くの図書の利用を必要ならしめた。この要求に対処するため、中央図書館内のアルコーブ(alcove)に関係図書を書庫から取り出してきて配架した。このアルコーブのコレクション、すなわちリザーヴ・ブックは貸出しが許されていなかったので常時利用できた。しかしながら、当初このリザーヴ・ブック制度を利用する教員の数は少なく、J. Winsor がハーバード大学の図書館長に就任した1877年の時点でこのシステムを利用していた教員はわずか2、3人にとどまっていた。⁷⁰⁾それでも、“図書の目的は読まれることにある”⁷¹⁾という信念を抱いていた Winsor は、リザーヴ・ブック制度を図書館の利用を促進するためのすぐれた手段と考え、その普及に力を注いだ。彼の尽力によって、ハーバードのリザーヴ・ブック制度は、“学外者が古びた図書館の中央ホールを歩き回ってみれば、あたかも個人が自分専用にアルコーブを占取しているかのように、教員の名前をかかげた沢山の専門コレクションあるいは図書群に出会うであろう”⁷²⁾と評されるほどの盛況を示すに至った。その数字をみると、1880年に35人の教員が合計3,330冊、1888年には少なくとも60人の教員が合計5,848冊をリザーヴ・

ブックに指定した。⁷³⁾

リザーヴ・ブック制度が広まるにつれて、アルコーブのある一般閲覧室が混雑をきたすようになった。その上、照明設備が不十分だったことから、各学科のクラス・ルームに隣接した部屋へワーキング・コレクションを移すことで、利用の不便を解消しようとする要求が当然の如く生じてきた。この動きは、1886年にアメリカ史と政治経済学のクラス・ルーム・コレクションが設置されたのを手始めとして、1890年にはギリシャ語、ラテン語、数学、フランス語、英語、サンスクリット語、ドイツ語、哲学、社会問題の11学科にも及び、そのコレクションの規模は合計約3,500冊であった。⁷⁴⁾このようなコレクションを所蔵する図書室は、通常、リザーヴ・ブック・コレクションよりも規模が大きく、学科の教育の中心となり、教員と学生の会合場所として使われた。クラス・ルーム・コレクションとリザーヴ・ブック・コレクションは同じ目的に奉仕するものであったが、ハーバード大学に関する限りでは、前者が後者にとって代ることはなく、両者は並行して発展していった。

3. 部局図書館

一般にセミナー図書室、実験室コレクション、更には前述のリザーヴ・ブックやクラス・ルームのコレクションが学科図書館の起源とみなされている。しかし、これらのコレクションの形態を厳密に区別することは難しい。例えば、ハーバード大学のクラス・ルーム・コレクションは学科図書館とみなしても差し支えないものだった。また、コロンビア大学ではBaker 館長の時代(1889-1899年)に、研究上価値のある資料を研究室あるいはクラス・ルームの近くに配置するように求める声が教員から強く出され、1899年までには17の学科図書館が設置された。⁷⁵⁾とはいえ、学科図書館といっても機械工学科のわずか3冊から動物学科の2,610冊までその規模はまちまちであり、セミナー図書室や実験室コレクションと大差ないものも含まれていた。

プロフェッショナル・スクール図書館(特に神学、医学、法学)は、その起源をスクールの創設時に求められる例が多く、比較的早くからカレッジ図書館とは独立に発展していた。

アメリカ内務省教育局の1876年の報告書によると、7つの大学(エール、ノースウェスタン、ハーバード、ミシガン、ダートマス、コロンビア、ペンシルベニア)が、カレッジ図書館からは独立のプロフェッショナル・スクール図書館とみなせるものを有していた。⁷⁶⁾その内訳を

みると、やはり神学、医学、法学の伝統的なスクールが中心であり、これに加えて、農学、工学、鉱山といった新参のスクールが含まれている。蔵書規模の面では、大きいところでハーバードの神学図書館1万7千冊、エールの法学図書館5千冊、ペンシルベニアの医学図書館3千冊といった状況であった。しかしながら、大学のプロフェッショナル・スクール図書館は、法律コレクションにおいて州立の公共図書館や大都市の法律協会に劣り、神学コレクションでは宗派の神学校の方が充実しており、医学分野ではヨーロッパの優れた医学図書館に比肩できるのはワシントンの軍医総監局(Surgeon General's Office)図書館ぐらいのものであった。⁷⁷⁾これがこの時期のプロフェッショナル・スクール図書館の実状であった。

シカゴ大学における部局図書館の発展は、ハーバードやコロンビアといった歴史の古い大学のそれとは様相を異にしていた。1892年の開学時に、シカゴ大学は学生数594人(そのうち大学院生は166人と少なかったが、次第にその比率を高めてゆく)と28の学科⁷⁸⁾を有していた。各学科はそれ自身の図書館を持つべきであると主張する初代学長 W. R. Harper の構想に沿って、シカゴ大学の図書館は最初から分散システムで出発した。その結果、創立の年からひとつの中央図書館と約20の部局図書館が出現することになった。中央図書館は遺贈図書や古いコレクションの購入などによって相当の冊数を所蔵していたが、それは、“間に合せの建物に収容された魅力のないまったく不適切なもの”であり、減多に利用されることのない図書の倉庫であった。⁷⁹⁾それに対して、部局図書館は学科の研究・教育のワーキング・コレクションを形成していた。このようにシカゴ大学図書館はその出発点から図書館相互に何の調整もないまま、各々勝手な管理・運営で発展していった。

これまで、大学図書館組織・サービスの多様化を分散システムの展開としてみてきたが、ここで発生史的な観点から分散化プロセスの類型化を試みてみると、以下の2つの基本類型を析出できる。

- (1) カレッジ図書館から支脈としてセミナー図書室や学科図書館の分化。
- (2) 大学の創立時から中央図書館と部局図書館が並行して発展。

この2類型の間に比較的自律性の強いプロフェッショナル・スクール図書館や、大学図書館とはまったく関係をもたない学科内のインフォーマルなコレクション⁸⁰⁾と

いった諸要素が加わって、大学図書館組織のいくつかのヴァリエーションをかたちづけている。類型(1)にあてはまるのは小規模のリベラル・アーツ・カレッジである。ハーバード、コロンビア、エールのように“カレッジ”から“ユニバーシティ”へ発展してきた大学は類型(1)と類型(2)の中間に位置づけられる。⁸¹⁾類型(2)は19世紀後半にドイツの大学をモデルにして創設された研究センターの大学に見出される。シカゴ大学はその典型といえよう。

IV. 1920, 30年代における部局図書館

19世紀末以降の部局図書館の著しい発展は、1910年代から30年代にかけて、アメリカの図書館界および大学内部で多大の関心を引き起こすことになった。こうした動きに応じたかたちで、部局図書館の実態把握を目的とした調査・研究が20年代および30年代にいくつか実施された。それらの調査・研究とは、蔵書5千冊以上の図書館3,034館(大学711館、公共・準公共2,323館)を対象にした1924年のALAによる大規模な調査、⁸²⁾1925年のALA冬期大会で報告されたミネソタ大学図書館長 F. Walter の調査、⁸³⁾1927年に刊行された G. A. Works による18大学図書館についての調査・研究、⁸⁴⁾1937年に発表されたノースカロライナ大学商業図書館長 G. H. Elliot による24大学のビジネス・マネジメント関係の部局図書館を対象とした調査、⁸⁵⁾そして1939年に専門図書館協会(Special Library Association, 以下 SLA と略す)が発表した51の部局図書館についての調査⁸⁶⁾である。

上記5つの調査・研究を中心に部局図書館の具体例を若干織り込みながら、20年代および30年代における部局図書館の実態を探ってみよう。

A. 部局図書館の数と蔵書規模

蔵書10万冊以上を有する大学における部局図書館およびセミナー図書室の数を示す第5表を見ると、部局図書館においてはカリフォルニアの77とハーバードの68が断然群を抜いており、その後にアイオワの21、ブラウンの20と続く。少ない方からみると部局図書館を持たないコルゲートとウェズレリアンを筆頭に、アマースト、ハミルトンのカレッジが続く。このように各大学間で相当の差がみられる部局図書館の数と大学の性格・蔵書規模との間に明らかな相関関係を認めることは難しいが、大雑把にみて、次のように言えるのではないか。すなわち、ハーバードやエールといった歴史が古く、しかも大規模な大学、ブラウン大学のように規模の点では前者に及ばないが、同様に歴史の古い大学、カリフォルニア、シカ

アメリカ高等教育変革期における大学図書館

第5表 部局図書館・セミナー図書室の数 (蔵書10万冊以上の大学)

大 学 名	部局図書館		セミナー 図書室
	管理運営 の独立	管理運営 の集中	
Amherst		1	若干
Brown		20	
Bryn Mawr		5	15
Catholic Univ. of American		4	5
*California ¹⁾	5	72	
Chicago		15	
Colgate			11
*Cornell	8	4	
Colorado		9	
Dartmouth	3		10
Hamilton		1	2
Harvard ²⁾	51	17	
*Illinois	4	10	
Indiana	1	12	5
Iowa	5	16	
Michigan	5	13	
Minnesota		11	15
Missouri		5	4
North Carolina		11	4
Northwestern	4	8	10
Notre Dame		5	
Oberlin		10	15
Ohio Wesleyan		10	3
Oregon	2		4
Pennsylvania	12		15
Princeton		5	9
*Stanford	2	2	
Texas	3	5	5
Vassar		12	11
Washington, Univ. of	2	7	
Washington Univ.	5	8	
Washington, State College of		若干	8
Wellesley	1		
Wesleyan			若干
Yale		34	

出典：ALA. *Survey of libraries in the United States*. Vol. 1, Chicago, 1926. p. 172.

- 1) * のついている大学の数字 (1925年現在) は, Works, G. A. *College and university library problems*. Chicago, ALA, 1927. p. 130-1. に

よる。ただし, Works の調査は部局図書館をスクールおよびカレッジ図書館 (大学内の) と学科図書館に分けているので, ここでは前者を「管理運営の独立」, 後者を「管理運営の集中」の中に入れた。

- 2) Harvard の数字 (1933年現在) は, *The library of Harvard University; Descriptive and historical notes*. 4th ed. Cambridge, Harvard Univ. Press, 1934. p. 41-3. からとった。

ゴ, ミシガンといった歴史は新しいが規模の大きな大学の3つのグループが, 概して, 部局図書館を多く設置している。他方, アマースト, コルゲート, ダートマス, ハミルトンといったリベラル・アーツ中心のカレッジやウェズレイやオレゴンといったこの調査対象の大学の中では小規模といえる大学は, 概して部局図書館の数が少ない。また, セミナー図書室は, 大学の規模にあまり関係がなく, プリンマー, コルゲート, オーパーリンといったカレッジが相当数のセミナー図書室を持っている。

しかし, 上述の説明は一般化できるものではない。というのは, プリンストンのようにブラウンの2倍以上の蔵書を持ちながら, 部局図書館の数が4分の1でしかない大学がある一方, アイオワのように歴史が比較的新しく, 規模もそう大きくない大学であっても21の部局図書館をもっている事実があるからである。

ALA 調査は10万冊以上の大学を対象としたものであるが, それ以下の大学でもある程度の分散システムをとっている例が多くみられることがWalter の調査で明らかになっている。その調査によると, 蔵書5万~10万冊の38カレッジ図書館のうち5館だけが部局図書館やセミナー図書室を持たず, 2万~5万冊規模の60カレッジ図書館のうち約3分の1がある程度の分散化を行なっている。従って, ここでは, 部局図書館の数, つまり分散化の程度は各々の大学の個別事情によって大きく左右されていることを確認するととどまる。

第6表は大学の全蔵書に占める部局図書館蔵書の割合を示したものであるが, それによると, 部局図書館蔵書の比率がアイオワの59.5%, ハーバードの52.7%と半分を越す大学もあれば, アマーストやオーパーリンのように2%台のところもある。

また, Walter の調査をみると, 個々の部局図書館によってもその蔵書規模にかなりの幅がある。例えば, 小さいものでスタンフォードの細菌学コレクション150冊やエールの看護学図書館262冊, 最も大きいものでミシガンの法律コレクション68,113冊である。通常, 蔵書規

第6表 全蔵書に占める部局図書館蔵書の割合

	A	B	B/A
	全蔵書(冊)	部局図書館蔵書(冊)	%
Amherst	122,496	2,500	2.0
*Brown ¹⁾	326,000	76,000	23.3
California	570,544	91,122	16.0
*Chicago	736,500	286,500	38.9
Cincinnati	117,070	49,026	41.9
Cornell	724,452	138,649	19.1
Harvard ²⁾	3,479,269	1,831,867	52.7
Illinois	559,617	243,100	43.4
Iowa	271,809	161,649	59.5
Michigan	596,614	167,374	28.1
Minnesota	445,454	125,124	28.1
North Carolina	147,422	32,856	22.3
Oberlin	260,930	7,300	2.8
Oregon	152,596	16,500	10.8
*Ohio State	254,187	46,900	18.5
Rutgers	125,453	36,600	29.2
Stanford	331,528	57,000	17.2
Texas	286,000	56,000	19.6
Tulane	57,037	2,610	4.6
*Wisconsin	328,000	99,000	30.2
Yale	1,697,322	254,067	15.0

出典：Works, G. A. *College and university library problems*. 1927. p.130-1. より作成.

- 1) * のついている大学の数字は Walter の調査 (ALA. *Survey of libraries in the United States*. vol. 1, 1926. p.184. に所収) からとった.
- 2) Harvard の数字(1933年現在) は, *The library of Harvard University*. 4th ed. 1934. p.41-3. から算出.

模の点では、プロフェッショナル・スクール図書館の方が学科図書館より勝っていることは確かである。

しかしながら、大学の蔵書全体に占める部局図書館蔵書の比率が分散化の指標としてそれほど意味を持つものとはいえない。その理由は、ユールのようにその比率が15%であっても、部局図書館の数は34もあるといった例、あるいは部局図書館の数が少なく、その上、中央図書館の蔵書規模が大きくても研究・教育上の価値あるコレクションを大部分部局図書館が所蔵している大学の例もあるからである。

B. 管理運営

ALA 調査は部局図書館を管理運営面から次の2つのカテゴリーに分けている。(1)中央図書館の管理から独立している部局図書館、(2)中央図書館の管理下にある部局図書館。(1)のカテゴリーに分類される図書館の大部分は、医学、歯学、法学、経営、教育、鉱山といったプロフェッショナル・スクール図書館である。このようなスクール図書館は各々のスクールの一部門として位置づけられ、中央図書館の一部とはみなされていない。Works の指摘するように、スクール図書館の中でも法学図書館はどの大学においても最も強い独立性を保っている。ALA の調査では、7大学がそのような独立の法学図書館を報告している。その次に独立性の強いのが医学と歯学の図書館である。このように法学や医学の図書館が独立性を保っているのは、スクールが大学の中央キャンパスから離れているといった立地条件、たとえ中央キャンパス内にあっても専用の建物を有しているといった距離・施設上の要因、更には医学や法学分野の文献の特性、といったことに依るところが多いと考えられる。しかし、Works の言葉を借りれば、こうした種類の管理形態も結局は、“伝統の問題”であり、ミネソタやノートルダムのように法学図書館が中央図書館の管理下に入っていたり、ミシガンのように医学図書館が中央図書館の建物内に収容されている例も見出すことができる。

中央図書館からの独立の程度もまた様々である。完全に独立している図書館もあれば、名目上、中央図書館の管理下にある図書館もある。概して、資料購入や目録といった業務については中央図書館に依存しているところが多く、予算面については、特にスクール図書館の場合、独自の予算を持つことが多い。ワシントン (Washington Univ.) の部局図書館 (美術、法学、歯学、医学、植物学) のように、各々の図書館が個別の予算を持ち、発注受入や目録業務も別々に行なっている完全な独立の例は珍しい。学科図書館の場合、独立している例は少なく、ALA 調査ではウェルズリーの自然科学の学科図書館が独立の予算で運営されているぐらいのものである。

Works は、管理面における中央図書館と学科図書館との関係を3つのタイプに分けている。それは、(1)学科図書館にかなりの独立性が与えられているグループ、(2)学科図書館の蔵書が中央図書館のサービスの構成部分になっているグループ、(3)明確な方針を定めていないグループ、である。(1)のグループの例としてカリフォルニア大学が挙げられる。この大学では学科図書館を学科の研

究・教育のための装置あるいは備品とみなし、その図書の購入には中央図書館の予算ではなく学科の予算を用い、学科長が図書館の管理責任を持つという決議が評議員会で承認されている。ALA 調査によると、エールの場合、中央図書館であれ、部局図書館であれ、それらすべての蔵書を大学の蔵書の構成要素とみなし、学内のすべての図書館に対する管理権限は大学図書館長に属していた。エールでは部局図書館の管理について学科長もしくは学部長と協力するように規定されているので、一応 Works の(2)のグループに分類できようが、実際には部局図書館の多くが独自の年間予算を持ち、それによって図書を購入しており、そこでは大学図書館長は補佐としての役割しか与えられていない。

Works による(2)のグループの図書館は、ほとんどの場合、その蔵書は中央図書館蔵書の一部を構成し、その購入が中央図書館の予算からであろうと、学科の予算からであろうと、中央図書館に属するものとみなされる。そのような学科図書館の図書は中央図書館によって購入・整理された後、期限なしあるいは長期にわたって学科に委託される仕組みになっている。セミナー図書室の場合、その蔵書は期限なしで中央図書館から貸出されていることもあるが、学科図書館と比べれば一時的な性格の強いものである。

SLA 調査においても、プロフェッショナル・スクール図書館（この調査では collegiate library という語が用いられている）に関しては、大学図書館よりもスクールと密接な関係を持っていることが報告されている。すなわち、51の部局図書館のうち19館がスクールの一部門として機能している。この調査では大学図書館長が部局図書館に対してかなりの権限を有していることが確認されている。45の部局図書館のうち19館が大学図書館長の管理下に入っており、12館が大学図書館長と教授団の両方に従属しており、残りの14館が教員から成る図書館委員会に対してのみ責任を負っている。この3番目のケースにプロフェッショナル・スクール図書館が多く属している。結局、大学図書館長が部局図書館の管理に関して一定の権限を握っているのは31館ということになる。また、財政面については、33の部局図書館が中央図書館から予算の配分を受け、21館が学科の予算を用いている。ただし、後者の21館のうち13館は中央図書館の予算にも依存しているので、専ら学科の予算だけで運営されているのは8館にとどまる。Elliot は中央図書館からの配分予算を補足するものとして、学科の特別基金、寄付金、

使用料、延滞料などをあげている。

中央図書館の予算にも学科の予算にも頼らず、学生の全面的な負担による図書室(student supported library)、つまり一種の準学科図書館(quasi-departmental library)が存在する。以下、この種の図書室がどのようにして運営されていたかを、オハイオ州立大学の英語学科の学科長 J. F. Fullington 準教授の記述に基づいて紹介することにしたい。⁸⁷⁾

オハイオ州立大学英語学科の近・現代文学コースでは、大学の図書館に適切な図書と十分な複本が備わっていないこと、またアンソロジーを使用することはコースの内容を限定してしまうこと、かといって学生に必要な図書を買わせるのはかなりの負担を強いることになる、といった理由で学生1人当たり2ドルずつ徴収し、その資金を基にして図書室を設置・運営した。各図書に平均15冊の複本を用意し、各コースのスケジュールを学期開始前に調整して効果的な運営に努めた。このような措置によって、コースで使用する資料を新鮮なものにでき、学生ひとりひとりに全部で20ドルにもなる図書12冊の提供が可能になった。同時に、他の学科が所持していない近・現代文学のコレクションを構築することができ、学生にも自発的な読書習慣を身につけさせることができるというねらいがあった。Fullington はこのシステムの成功要因として、(1)多数の受講者、(2)毎学期開講されるコースをいくつかのセクションに分けることができたこと、(3)リーディング(reading)の多様な組み合わせが可能なることを挙げ、150人位の学生が受講しているコースに同様の図書室の設置を推奨している。この図書室は大学図書館とは全く関係をもたず、学科が管理し、負担金の徴収などの仕事は大学の事務局が手伝い、運営は大学院生と学生に任せられていた。

当時、この種の図書室がどの程度普及していたか定かではないが、教員が熱意をもち、規模も小さく、管理業務が煩雑でない間は順調に続いた。しかし、コレクションが大きくなり、目録・分類といった専門技術が必要となるにつれて運営が困難となり、結局、消滅あるいは大学図書館の1部に併合されてしまうのが通例のようであった。⁸⁸⁾

C. 部局図書館員とサービス

1912年、コロンビア大学図書館長だった W. D. Johnston は、部局図書館の運営を学生助手(student assistant)に任せることの欠陥を衝いて、一貫した専門的サービスを提供できる専任の図書館員の配置を提唱した。Johnston はその職に専門分野の研究者を採用すること

よりも、図書館の補助職員 (junior assistant) に大学の講義を毎年ひとつ受講できる機会を与え、その専門分野の知識を習得させて部局図書館員に採用することを提唱した。⁸⁹⁾

だが、図書館管理 (library economy) の知識と主題知識の2つを合せ持つ図書館員を部局図書館に配置しようという Johnston の提案にもかかわらず、⁹⁰⁾ その13年後の Walter の調査報告をみても、それが十分に実現されたとはいえない状況にあった。というのは徐々に部局図書館へ専任職員を配置する傾向が出てきたとはいえ、相変わらず学生もしくは事務助手、さもないと教員の片手間仕事で運営されている例が多かったからである。確かに専任の図書館員がいなくても、部局図書館の管理担当者 (supervisor) が定期的に訪問し、直接運営にあたっている学生や事務職員のための仕事を計画してやればかなりの程度のサービスが可能であろう。しかし、レファレンス・サービスや書誌的業務といった専門的なサービスの提供は難しい。その上、運営にあたる学生が毎年入替る可能性があるので一定水準にサービスの質を維持してゆくことも困難である。また、教員による管理にしても、それはあくまで片手間でしかなく、十分に行き届いた仕事を期待することはできず、従って「教員は注意の行き届いた管理運営をする理由を理解していない」⁹¹⁾ といった批判が図書館側から出てくることになる。

SLA 調査は部局図書館員の適性に対する関心の高まりを指摘し、部局図書館がどのような管理系統下にあるかが部局図書館員の性格に影響を与えていると述べている。すなわち、図書館長が部局図書館員の任命権を有する集中管理体制では、図書館専門職としての適格性が重視され、一方、学部長、学科長、あるいは教員からなる図書館委員会に決定権がある場合には専門主題に精通しているかどうか的比重がかけられる。更に SLA 調査は事務的な仕事を行う事務助手の全般的な不足を指摘し、専門職の図書館員が図書選択、書誌作成、レファレンスといった専門的業務により多くの時間を割くことができるように事務助手増員の必要性を訴えている。この主張を裏付けるように、調査対象の47館がすべてレファレンス・サービスを実施しており、利用者もレファレンスの重要性を認めており、その上、レファレンス・サービスに関連する新しい活動の拡張も報告されている。

SLA 調査によると、部局図書館員の規模に影響を与える要因は、(1)開館時間、(2)学生数、(3)教員数、(4)蔵書数、(5)図書館の成長率、(6)建物・場所の6点であり、そ

の質に影響を及ぼす要因は、(1)高い水準の整理・サービス業務の要求、(2)教育方法—カリキュラムの内容、(3)図書館の現行業務の内容と水準、の3点である。

結局、部局図書館員に関しては、高度な主題知識と図書館学の専門教育の必要性が叫べられ、規模の大きなプロフェッショナル・スクール図書館レベルではそれが実現されつつあった。とはいえ、通常の学科図書館や小さなプロフェッショナル・スクール図書館の乏しい予算では上記の条件を満たす図書館員を雇うことが難しい状態にあった。それでも、1930年代の後半には以下に紹介する部局図書館員のかなり質の高い1日の仕事ぶりが「典型的」とみなされるまでになっていた。

8時30分に息せき切って到着。クリッピング・ファイル作成のため新聞に目を通し、関係のあるニュース記事を探し出す。新着雑誌をチェックし、教員に関心のありそうな論文を見つけて雑誌リストに記入。手紙の処理、レファレンスの電話応対。新着図書に目を通す。新刊図書の発注。書誌の作成。新しい図書や資料を探索する。古書店の目録を調べる。図書館の問題について学部長 (Dean) あるいは図書館長と協議。会議に出席。大学院生の書誌作成について相談にのる。学生助手のトレーニングを手伝う。展示の準備。図書館員のプロジェクトに参加。⁹²⁾

D. 収書と整理

部局図書館は教員や学生のニーズに応じることのできる専門分野の図書、逐次刊行物、専門学会や関連学会の出版物、更には一般的な性格の雑誌などを収集しなければならない。蔵書の構築のためには主題の専門家であり、かつ講義に必要な資料を知っている教員が専門雑誌の書評や広告等の情報源に目を通し適切な資料を選択するのが理想である。しかし現実には、教員がこの種の仕事を定期的に行うことは時間的に難しい。そこで主題知識を有する図書館員が各種の情報源をチェックし、教員による資料選択を援助することになる。ただこうした援助も主題知識に精通している図書館員のいる部局図書館の場合にのみ可能なことであって、もっぱら学生助手や事務職員の兼務で運営されている部局図書館には到底望むべくもない。後者の場合、よほど教員の協力がなければバランスのとれた蔵書の構築が困難である。

マサチューセッツ工科大学電気工学科の準教授 K. L. Wildes が紹介している同大学ペール図書館の2人の部

局図書館員のように、資料収集能力について教員から信頼を得ている例は稀である。⁹⁸⁾ 通常、学長や教員から図書館員へ向けられる批判は、図書選択や発注業務における主題知識の欠如あるいは不足に関してであった。

SLA 調査によると、部局図書館員が資料収集のために利用している情報源は次の6つである。(1)専門雑誌・業界誌、(2)官公庁出版物のために *Monthly Catalog of United States*. と *Monthly Check-List of State Publication.*, (3)*Special Libraries* の “Publications of Special Interest” 欄、(4)*New York Times Book Review*, (5)*Publisher's Weekly*, (6)出版社目録。*Cumulative Book Index* や *Book Review Digest* のような包括的な2次資料は部局図書館ではほとんど価値を持たず、通常、このタイプの情報源のチェックには時間がかかりすぎ、しかもその中から適切な文献を選び出すには相当の主題知識が要求される。こうした事情から、部局図書館の収書を中央図書館に委託することは有効でないとSLA調査は結論づけている。

整理業務に関して、Walter の調査では2つの大学(ノースウェスタンとエール)を除く20の大学が部局図書館の目録作成を中央図書館で全部もしくは大部分ひき受けていることが報告されている。その中で、法学、医学、音楽といったスクール図書館が独自に整理業務を行っている例が多い。他方、SLA 調査によると、28の部局図書館が中央図書館の整理業務に依存しているが、独自に目録を作成している図書館も18館みられる。このようなSLA調査の結果は、対象館の大部分が医学、歯学、法学、経営といったスクール図書館および美術や音楽といった特殊分野の図書館によって占められていることによるものである。

SLA 調査によると、目録規則としてALA規則とLC規則を採用している部局図書館が30館もあり、独自の目録規則をもつ必要性を認めているのはわずか8館にすぎない。この結果から考えて、目録作成について中央図書館と部局図書館の間に大きな障害はないと言えよう。

やはり問題は分類表と主題目録(分類目録と件名目録)である。SLA 調査では、デュイ十進分類法(DDC)の使用が31館、アメリカ議会図書館分類表(LCC)の使用が11館である。“現在、一般に用いられている2つの標準分類法〔DDCとLCC〕は両方とも物理学者がみたら憤慨しそうな専門用語を使っている。……いくら最新版であっても、DDCは図書の分類表というよりもむしろ

古くなった教科書の内容目次といってよい。”⁹⁴⁾と批判されているように、専門分野を対象とする部局図書館にとって既存の分類表は大いに不満のあるものである。そのことをSLA調査結果が如実に物語っている。すなわち、22の図書館が既存分類表を修正ないし展開して用いており、14の図書館が独自の分類表を望んでいる。また、件名標目についても、23の図書館がアメリカ議会図書館件名標目表(LCSHL)もしくはLCSHLに基づく件名標目表を使用しているが、独自の件名標目表の必要性を感じている図書館は20館にものぼっている。一般には部局図書館は“すべての資料が中央図書館の目録部門を通されるならば、件名標目について不満足な結果が生じることになる。”⁹⁵⁾と考えていた。以上のような点から、分類・件名作業は部局図書館が担当すべきであるという意見⁹⁶⁾や主題分析に関して部局図書館が中央図書館の目録部門と密接に協力し、助言を与えることによって、利用者のニーズにより効果的な対応ができるといった提案⁹⁷⁾が出てくることになる。

V. 結 語

巨視的にみて、アメリカ高等教育変革期における大学図書館の発展はとりもなおさず分散化の過程であった。1920年、30年代には、この分散システムは、予算、職員、書誌コントロールといった問題を内包しながらも部局図書館の発展として一層の進展をみせた。

だが、かかる分散化は何の抵抗もなく順調に進行したわけではない。その過程には大学内の諸グループの利害が複雑に絡み合っており、幾多の曲折があった。シカゴ大学における集中化をめぐる議論はその最たる例であろう。また、いくつかの大学では、分散システムの弊害を解決するための改革案が打ち出され、実施に移されている。代表的なものとして、ブラウン大学等の主題部門別図書館(subject-divisional library)、カリフォルニア大学バークレー校の分館システム(branch library system)、ハーバード大学の調整された分散システム(coordinated decentralized system)、同じくハーバード大学に代表される学部学生用図書館(undergraduate library)といった構想があげられる。本稿ではこれらの構想が生れてきた一般的な背景を高等教育の流れの中で考察してきた。この背景をふまえて次に集中システム対分散システムの議論を直接取り上げるのが順序であろうが、それは別の機会にゆずりたい。

- 1) Bliss, H. E. "Departmental libraries in universities and colleges," *Educational review*, vol. 49, April 1912, p. 387.
- 2) Association of College and Research Libraries. "Draft: Guidelines for branch libraries in colleges and universities," *College and research libraries news*, no. 11, Dec. 1974, p. 281.
- 3) Tauber, M. F. et al. "Centralization and decentralization in academic libraries; a symposium," *College and research libraries*, vol. 22, Sept. 1961, p. 327-40, 398.
- 4) この報告書は次のように指摘している。
 "図書館長は、蔵書の集中化と分散化、ひいては施設の集中化と分散化といった相対立する圧力の間にはさまれている。大学の管理者は、蔵書の重複とサービスの分散を最小限にいとめることを望んでいる。教員と大学院生は分散による部局図書館を要求している。生命科学のようないくつかの学問分野をカバーする大規模な分散による図書館設置の傾向が多くみられる。学部学生と大学院生の専用図書館設置というすでに定着している傾向も続いている。
 施設の集中化と分散化は、大学図書館長に重大な管理上の問題を投げかけている。新しい建物を計画したり、既存のスペースを転用しようとする際に、図書館にとって機能を分散することが効果的で効率的か、反対に集中する方が有利かを判断しなければならぬ。このような決定を下すのに役立つデータがほとんどない、と図書館長たちは述べている。" Booz, Allen and Hamilton, Inc. *Problems in university library management*. Washington, D. C., Association of Research Libraries, 1970. (ERIC ED 047 719) p. 35.
- 5) Wyer, J. I. *The college and university library*. Chicago, American Library Assn., 1928, p. 22-5.
- 6) Randall, William M. and Goodrich, F. L. D. *Principles of college library administration*. Chicago, American Library Assn., 1936. p. 199-210. 第2版(1941年刊)は未見。
- 7) Lyle, Guy R. *Administration of the college library*. 2nd ed., New York, Wilson, 1949. p. 79-86.
Ibid., 3rd ed. 1961. p. 58-62.
Ibid., 4th ed. 1974. p. 45-7.
 初版(1944年刊)は未見。
- 8) Wilson, Louis R. and Tauber, M. *The university library*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1945. p. 127-40.
Ibid., 2nd ed., New York, Columbia Univ. Press, 1956. p. 148-9.
- 9) Rogers, Rutherford D. and Weber, D. *University library administration*. New York, Wilson, 1971. p. 73-82.
- 10) 一貫した扱いといっても、その当時の動向が反映されているので、各著作あるいは同一著作の各版によって扱い方や内容に相違がある。例えば、カレッジの図書館を対象としている Lyle の著書は、総合大学の図書館を対象としている Wilson と Tauber, Rogers と Weber の二著よりもこの問題に割いているページ数は少ない。また、Wilson と Tauber の第1版は、1924年のシカゴ大学報告書を大きく紹介しているが、第2版ではそれが削られ、代ってハーバード大学図書館長 K. D. Metcalf の "調整された分散制 (coordinated decentralized system)" をとりあげている。
- 11) Ibbotson, Louis T. "Departmental libraries," *Library journal*, vol. 50, Oct. 15, 1925, p. 856.
- 12) 定量的研究としては立地理論 (location theory) を適用した研究がある。
 Raffel, Jeffrey and Shisko, Robert. "Centralization vs decentralization: A location analysis approach for librarians," *Special libraries*, vol. 13, March 1972, p. 135-43.
- 13) Bruno, J. Michael. "Decentralization in academic library," *Library trends*, vol. 19, Jan. 1971, p. 312.
- 14) 一般に大学図書館システムの中核になる図書館を表わす用語として、Central library (中央図書館), Main library (本館), General library (総合図書館) の3つが使われている。しかし、これらの用語の間には必ずしも明確な区別があるわけではなく、しばしば同義に使われている。従って、本稿では原則として<中央図書館>の訳語に統一する。
- 15) それらを以下に列挙する。Branch library, Collegiate library, Departmental library, Divisional library, Institutional library, Laboratory collection, Office collection, Quasi-departmental library, (Professional) School library, Seminar library, Separate library, Special library, Student's library, Undergraduate library.
- 16) Wilson and Tauber, *op. cit.*, 2nd ed., p. 149.
 Randall and Goodrich, *op. cit.*, p. 200.
- 17) Lyle, *op. cit.*, 4th ed., p. 45.
 Association of College and Research Libraries, *op. cit.*, p. 281.
- 18) Ibbotson, *op. cit.*, p. 853.
 Randall and Goodrich, *op. cit.*, p. 199-200.
- 19) American Library Association. *Survey of libraries in the United States*. vol. 1. Chicago, ALA, 1926. p. 171.
- 20) Randall and Goodrich, *op. cit.*, p. 207-8.
- 21) American Library Association *op. cit.*, p. 170.
 White, Lucien W. Departmental libraries.
 <Kent, Allen and Lancour, H., ed. *Encyclopedia of library and information science*. vol. 6. New York, Marcel Dekker, 1971.> p. 596.

- 22) Rogers and Weber, *op. cit.*, p. 73-8.
Association of College and Research Libraries, *op. cit.*, p. 281.
- 23) Ellsworth, Ralph E. "Trends in higher education affecting the college and university library," *Library trends*, vol. 1, July 1952, p. 8.
- 24) Hofstadter, Richard and Hardy, C. D. *The development and scope of higher education in the United States*. New York, Columbia Univ. Press, 1952. p. 30.
- 25) Ibbotson は 1925 年までのアメリカの大学および大学図書館の発展を決定づけた諸要因を 4 つに大別している。
 (1) 物的影響 (material influences): a. 移民の増加, b. 富の蓄積
 (2) 教育上の影響 (educational influences): a. カリキュラムに歴史科学や精密科学の導入, b. ドイツ大学の理念 (専門化, セミナールや実験室の方法)
 (3) 教育関係財団 (educational foundations)
 (4) 教育上の実験 (educational experiments):
 a. 女子教育, b. 個人基金による大学.
 Ibbotson, *op. cit.*, p. 854.
- 26) モリル法と州立大学の関係については, 大浦猛. "モリル法とアメリカの州立大学—19世紀における連邦の州立大学教育政策の研究," *教育学研究*, vol. 32, no. 2-3, 1965, p. 15-6. を参照.
- 27) U. S. Department of the Interior, Office of Education. "Survey of land-grant colleges and universities," *Bulletin*, no. 9, Washington, D. C. Government Printing Office, 1930, p. 10-1.
- 28) Brubacher, John S. and Rudy, W. *Higher education in transition; a history of American colleges and universities, 1636-1976*, 3rd ed., rev. and enl. New York, Harper & Row, 1976. p. 160.
- 29) 19世紀後半期のアメリカ資本主義の発展については次の文献を参照.
鈴木圭介編, アメリカ経済史. 東京大学出版会, 1972. p. 391-462.
- 30) Ben-David, Joseph. 科学の社会学. [*The scientist's role in society: A comparative study.*] 潮木守一・天野郁夫訳, 至誠堂, 1974. p. 189.
- 31) アメリカの初期の大学院については, 仙波克也. "アメリカにおける初期の大学院設立運動の性格—ジョンズ・ホプキンス大学以前を中心として—," 福岡教育大学紀要 (4. 教職科編), vol. 21, 1972. 2, p. 31-44. を参照.
- 32) ジョンズ・ホプキンス大学の出現の経緯については次の文献に詳しい.
潮木守一, "ドイツ大学とアメリカのカレッジ II," *IDE 現代の高等教育*, no. 220, 1980. 5, p. 55-63.
- 33) Berelson は大学院を 3 つのグループに類型化している.
 (1) ジョンズ・ホプキンス, クラーク, シカゴのような新設大学.
 (2) ハーバード, コロンビア, エールのような強力な私立カレッジ.
 (3) カリフォルニア, ウィスコンシンのような州立大学.
 Berelson, Bernard. *Graduate education in the United States*. New York, McGraw-Hill, 1960. p. 9. 大学院教育の発展については, 仙波克也. "19世紀後半のアメリカの大学院教育制度の展開," 福岡教育大学紀要 (4. 教職科編), vol. 23, 1974. 2, p. 1-13を参照.
- 34) Berelson, *op. cit.*, p. 25.
- 35) Walters, Everett, ed. これからの大学院. [*Graduate education today*] 木田宏監訳. 東京大学出版会, 1969. p. 18.
- 36) *Ibid.*, p. 29.
- 37) 1883年アメリカ現代語学会 (Modern Language Association of America), 1884年アメリカ歴史学会 (American Historical Association), 1885年アメリカ経済学会 (American Economic Association), 1888年アメリカ地質学会 (Geological Society of America), 1889年アメリカ政治学・社会科学アカデミー (American Academy of Political and Social Science), 1892年アメリカ心理学会 (American Psychological Association), 1899年アメリカ物理学会 (American Physical Society), 1901年アメリカ哲学会 (American Philosophical Association), 1902年アメリカ動物学会 (American Society of Zoologists), 1902年アメリカ人類学会 (American Anthropological Association), 1903年アメリカ政治学会 (American Political Science Association) Berelson, *op. cit.*, p. 15.
- 38) その15誌は, *American Journal of Philology* (1880年), *PMLA* (1884年), *Modern Language Notes* (1886年), *Quarterly Journal of Economics* (1886年), *Political Science Quarterly* (1886年), *Botanical Gazette* (1887年), *American Anthropologist* (1892年), *Philosophical Review* (1892年), *School Review* (1892年), *Physical Review* (1893年), *Psychological Review* (1894年), *American Journal of Sociology* (1895年), *American Historical Review* (1895年) Berelson, *op. cit.*, p. 15.
- 39) R. S. Bates は1866年から1918年までの時期を "専門化の勝利 (the triumph of specialization)" として捉え, 科学技術を中心に全国および地域レベルでの学会の実態を記している.
Bates, Ralph S. *Scientific societies in the United States*. 3rd ed., Cambridge, MIT Press, 1965, p. 85-136.
- 40) 世界教育史研究会編, 世界教育史大系26. 大学史 I. 講談社, 1974. p. 153.

- 41) 仙波克也, “アメリカの高等教育における職業技術教育の発達,” 広島大学教育学部紀要(第1部), vol. 16, 1968. 1, p. 97.
- 42) いわゆる新興の専門職に関して, アメリカの大学で最初のプロフェッショナル・スクールが設置されたのは, 歯学1867年, 建築と薬学1868年, 教員養成と獣医学1879年, 会計と経営1881年である。また, 専門職業の制度化の1要素である州ライセンス制度が確立されたのは, 歯学1868年, 薬学1874年, 獣医学1886年, 会計1896年, 建築1897年である。この他, 1894年までに, 21の州が医師の試験制度を設け, 14の州が認定を受けた医学スクールの卒業生のみ開業を許可した。
Bledstein, B. J. *The Culture of professionalism; The middle class and the development of higher education in America*. New York, W. W. Norton & Company, 1976. p. 83.
- 43) 仙波, “アメリカの高等教育における…,” *op. cit.*, p. 98.
- 44) Riesman, D. and Jenks, C. 大学革命 [*The academic revolution*] 国弘正雄訳, サイマル出版会, 1969. p. 84.
- 45) 宮沢康人は, アメリカにおける選択科目制度発達史を4期に分け, 1870年以降のEliotによる選択制実施の活動から選択制が一応の定着と普及をみる1910年までを第3期としている。
宮沢康人, “ハーバード学則改正(1825)とイエールレポート(1828)—アメリカにおける選択科目制度をめぐる論争の端緒,” 東京大学教育学部紀要, vol. 16, 1977. 3, p. 2-4.
- 46) Rudolph, Frederick. *The American college and university*. New York, Vintage Books, 1962. p. 294.
- 47) *Ibid.*, p. 303.
- 48) 選択制は次の4つの形態に分けられる。
(1)全科目選択制, (2)半分必修・半分選択, (3)専攻-副専攻(major-minor)システム, (4)グループシステム(全コースを科学, 哲学, 歴史のような大きいグループに分ける)
Brubacher and Rudy, *op. cit.*, p. 115.
- 49) *Ibid.*, p. 116.
- 50) アメリカの学科制度の独自性については, Ben-David, *op. cit.*, p. 208-9.を参照。
- 51) Veysey, Laurence R. *The emergence of the American university*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1965. p. 320.
- 52) 宮沢, *op. cit.*, p. 208-9.を参照。
- 53) ドイツのゼミナール・インスティトゥートについては, 潮木守一, 近代大学の形成と変容—19世紀ドイツ大学の社会的構造—, 東京大学出版会, 1973. p. 106-15を参照。
アメリカではセミナリー(seminary)という用語を使っている文献が19世紀末から20世紀初めにかけてみられるが, その後セミナー(seminar)という用語が一般的になっているので, 本稿では後者に統一した。
- 54) Veysey, *op. cit.*, p. 153.
- 55) Adams, Herbert Baxter. *The study of history in American colleges and universities*. [United States Bureau of Education, *Circular of Information*. no. 2.] Washington, Government Printing Office, 1887. p. 104-6.
この調査報告書は, ミシガン大学の他, ハーバード, ユール, コロンビア, コーネル, ジョーンズホプキンス, および4つの女子カレッジにおける歴史学(政治学や政治経済学を含む場合もある)の教育・研究の歴史, 現状が詳細に記されている。
- 56) Woodruff, Edwin H. “University libraries and seminary methods of instruction,” *Library journal*, vol. 11, July 1886, p. 222.
- 57) Veyseyの著書 *The emergence of American university*の要を得た紹介がある。
宮沢康人, “アメリカの大学目的観の生成—Veyseyの著書を中心に—,” 大学史研究, no. 1, 1979. 12, p. 25-35.
- 58) 1850年時点におけるドイツ諸大学の蔵書数は, ゲッティンゲン35万, プレスラウ30万, ミュンヘン22万, ハイデルベルク20万, チュービンゲン20万, その他に8大学が10万冊を越えていた。一方, アメリカで10万冊以上の大学はひとつもなく, ハーバードの8万4千冊を筆頭に, ユール5万, ブラウン3万2千といった程度で, 量質ともにまったく比較にならなかった。
Danton, J. Periam. *Book selection and collections: A comparison of German and American university libraries*. New York, Columbia Univ. Press, 1963. p. 20.
- 59) Edelman, Hendrik and Tatum, G.M., Jr. “The development of collections in American university libraries,” *College and research libraries*, vol. 37, May 1976, p. 224.
- 60) Johnston, W. Dawson. “The library as a university factor,” *Library journal*, vol. 39, Jan. 1914, p. 14.
- 61) Hicks, Frederick C. “Library problems resulting from recent developments in American universities,” *Library journal*, vol. 40, May 1915, p. 309.
- 62) Adams, Herbert Baxter. “Seminary libraries and university extension,” *Johns Hopkins University studies in historical and political science*, Fifth series, XI. 1887. p. 13-4.
- 63) *Ibid.*, p. 17.
- 64) Bakerの講義内容は政治学部(School of Political Science)の1886—87年度要覧でうかがい知ることができる。“この講義の目的は学生や研究者が有効に利用できるように歴史学や政治学の原資料を説明することである。最初, 政治学といくつかの関連分

野もしくは研究領域について全般的な説明を簡略に行い、次に、先進国の政治、法律、経済活動の記録である資料を国別にとりあげる。そこでは各国の歴史学の方法 (historiography) の簡単な紹介も合わせて行う。すなわち、主題に関する専門的な書誌文献、古い時代の年代記や歴史のコレクション、回想録のコレクション、歴史協会や類似の協会のコレクションと刊行物、条約や外交文書の一般的コレクション、特殊コレクション、統計コレクションとその他の経済関係出版物、政府・官庁刊行物 (公文書、議会議事録、法令、判例集および公法・民法分野の合集を含む) の説明である。こうした出版物の書名、引用形式、歴史、特徴、索引、利用法を教えようと意図している。各国の暦や索引 (印刷物もそうでないものも含めて) の説明と一緒に、古文書館や公文書館の性格、配列、利用規則も説明する。”
Adams, *The study of history...*, *op. cit.*, p. 82-3. から再引用。

- 65) *Ibid.*, p. 174-80.
- 66) “Report on college and university library statistics,” *Bulletin of the American library association*, vol. 1, Nashville conference. 1907, p. 265.
- 67) Austin, Willard. “Reference, seminary, and department libraries at Cornell,” *Library journal*, vol. 18, June 1893, p. 182.
- 68) 初期のリザーヴ・ブック制度 (reserved book system) は、1,2年生の授業の必須読書 (required reading) を意味する現在の制度とは異なり、主に参考のためもしくは個人学習のためのワーキング・コレクションを意図したものであった。
Brough, Kenneth J. *Scholar's workshop: Evolving conceptions of library service*. Reprint of the 1953 ed., Boston, Gregg Press, 1972. p. 50.
- 69) Emerton, Ephraim. History 1838-1929. (Morison, Samuel Eliot, ed. *The development of Harvard University since the inauguration of president Eliot 1869-1929*. Cambridge, Harvard University Press, 1930) p. 155.
- 70) Brough, *op. cit.*, p. 50.
- 71) Winsor, Justin. “The college library and the classes,” *Library journal*, vol. 3, March 1878, p. 5.
- 72) Adams, “Seminary libraries.....,” *op. cit.*, p. 15.
- 73) Lane, William Coolidge. The Harvard College Library. (Morison, *op. cit.*) p. 612.
- 74) “College library section,” *Library journal*, vol. 5, Nov. 1890, p. 142-3.
- 75) Linderman, Winifred B. *History of the Columbia University Library, 1876-1926*, Doctoral dissertation, Columbia University, 1959. p. 228. (University Microfilm No. 59-02859)
- 76) U. S. Department of the Interior, Bureau of Education. *Public libraries in the United States*

of America; Their history, condition and management. Special report, Part 1. Washington, D. C., Government Printing Office, 1876. p. 60-126.

- 77) Holley, Edward G. “Academic libraries in 1876,” *College and research libraries*, vol. 37, Jan. 1976, p. 40.
- 78) 生物学, 哲学, 政治経済学, 政治学, 歴史学, 社会科学 (社会学)・人類学, 比較宗教学, セム語・文学, 聖書ギリシャ語・教父ギリシャ語, サンスクリット・インドヨーロッパ語・文献学, ギリシャ語・文学, ラテン語・文学, ロマンス語・文学・文献学, ドイツ語・文学, 英語・英文学・修辞学, 英語聖書文学, 数学, 天文学, 物理学, 化学, 地質学, 植物学, 動物学・古生物学, 解剖学, 組織学, 生理学, 神経学, 雄弁術, 体育学の計28学科。
Storr, Richard J. *Harper's university; The beginnings*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1966, p. 186.
- 79) Burton, Ernest D. “The treatment of books according to the amount of their use. III.—Relation of departmental and group libraries to the main library,” *Library journal*, vol. 28, Niagara Conference, 1903, p. 20.
- 80) いわゆる準学科図書館 (quasi-departmental library) である。これは “特定の学科もしくは複数の学科の学生や教員が始めたもので、大学図書館の費用から援助を受けず、大学図書館職員の手を借りずに運営されているコレクションあるいは図書室” と定義される。
Genaway, David C. and Stanford, E. B. “Quasi-departmental libraries,” *College and research libraries*, vol. 38, May 1977, p. 187.
- 81) Brough は、これら3大学における図書館システムの構造が、以下の3つの基本的な発展の結果であると指摘している。
(1) カレッジ図書館が大学院に必要な研究資料の巨大な中央コレクション構築の中核となった。
(2) 古いプロフェッショナル・スクール図書館はその創立の起源からほぼ独立性を維持していたばかりでなく、新しく創設されたプロフェッショナル・スクールの同じようなコレクション設置の先行者になった。
(3) 図書館員と教授は学科の研究・教育のため小規模のコレクションを中央図書館から別置するよう協働した。
Brough, *op. cit.*, p. 117.
- 82) American Library Association, *op. cit.*, p. 168-95.
- 83) この調査報告は前掲の ALA 調査に収録されている。
- 84) Works, George A. *College and university library problems*. Chicago, American Library Association, 1927. p. 63-79.
- 85) Elliot, Guelda H. “The special library profes-

- sion and what it offers; 14—university and college departmental libraries,” *Special libraries*, vol. 28, Nov. 1937, p. 322–7.
- 86) Hausdorfer, Walter. *Professional school and departmental libraries*. [New York], [Special Libraries Association] 1939. 24 p.
- 87) Fullington, James F. “A self-supporting department library,” *English journal*, vol. 25, Oct. 1936, p. 656–62.
- 88) 事情は多少異なるが、カリフォルニア大学では大学当局が正規の図書費をクラスで利用する複本の購入にあてることを禁じたので、人数の多いクラスを担当する教員は複本コレクションを作るために学生から数セントづつ徴収することにした。しかし、その徴収方法が不公平でかつ不統一になり、しかもコースをいくつか取っている学生にかなりの負担になった。大学図書館はこうして事態を問題視し、複本購入の特別費を提供することによって学生からの図書費 (student book fee) 徴収を撤廃させた。
Leupp, Harold L. “The library the heart of the university,” *Library journal*, vol. 49, July 1924, p. 622.
- 89) Johnston, William D. “Administration of departmental libraries,” *Library journal*, vol. 38, Jan. 1913, p. 26.
- 90) こうした提案の背景には次のような一般的状況があった。“しかしながら現実には、そのもくろみ〔部局図書館システムによるレファレンス・サービスの主題専門化〕は実現しがたいことがわかった。すでに述べたように、多くの部局図書館は学部に属するものとして極めてずさんな運営が行われており、その職員は中央図書館の監督を受けず、また図書館運営についてのごく初歩的な考え方すら念頭になかったのである。そして、中央図書館の管理下におかれるようになった図書館にとっても、図書館学を専門とすると同時に特定の主題領域についても有能な職員を見つけ出す困難さはほとんど解決しがたいものであることがわかった。” Rothstein, Samuel. レファレンス・サービスの発達。[*The development of reference services through academic traditions, public library practice and special librarianship.*] 長沢雅男監訳。日本図書館協会, 1979. p. 108.
- 91) Venn, Mary C. “Departmental libraries,” *Libraries*, vol. 34, May 1929, p. 196.
- 92) Elliot, *op. cit.*, p. 325.
- 93) Wildes, Karl L. “What the college or institution expects of its departmental libraries,” *Special libraries*, vol. 27, Feb. 1936, p. 53–5.
- 94) Shields, Margaret C. “A semiautomatic departmental library,” *American physics teacher*, vol. 6, Feb. 1938, p. 9.
- 95) Hausdorfer, Walter. “Service of departmental library in a university,” *Special libraries*, vol. 23, July-Aug. 1932, p. 300.
- 96) Taylor, Evelyn. “Services and techniques in departmental libraries to promote the university teaching program,” *SouthWestern Library Association. Conference, 12th, New Orleans proceedings*; 1948. p. 80.
- 97) Grieder, Elmer M. “Functional independence in special libraries,” *Special libraries*, vol. 33, March 1942, p. 75.